

## 《隠謀学》入門Ⅳ

～自伝的ないしは内なる歴史と自然

村 岡 潔

〔抄 録〕

本稿は、前回の隠謀学入門Ⅲの正義の戦争はあるかを受けて、自分史におけるその源泉に遡ってみます。その個人史のなかで、同僚や先輩とのやり取りを通じてどのようにして隠謀学的視点を学ぶことになった予備校時代、大学闘争の時代、あるいは研修時代について、還暦を超えた目で再評価を試みます。当時は、人間の性質としての自然について興味を持ち始めた時期でした。

キーワード：歴史，自然，隠謀学，小さな指導者，自分史

「よい教師になるには、よい生徒になれ」—ノーマン・ベチューン

### (1) 「はじめに」～爽やかな予備校時代

本稿は隠謀学入門の第4稿目ですが、自分史と称して手前味噌を並べることになります。今回が初めてではないだろうと言う蔭の声が聞こえそうですが、その声には耳を塞ぐことにします。

さて人間はその外部にある時空間の中をさ迷っているものと私が疑いを持たなかったのは大学に入る以前、高校時代までのことでした。つまり歴史や自然が、人間の外部にある時系列や物理的環境に大きく規定されていると信じていたからです。それが崩れ始めたのは、現役での大学合格がかなわず、東京のお茶に水にある予備校に通い始めたころのことだったと思います。それは、大学や街頭で多くの大学生がいわゆる大学闘争<sup>(1)</sup>というファッションに真剣に生きていた時代でした。今日と違い、大学生ともなると、例え右翼とかスト破りと呼ばれるストライキ反対のものでもそれなりに天下国家のことを論ずる者も少なくなかったように思えます。

私の出た都立高校は、生徒の自主性を重んじる自由な雰囲気があるということで周囲には名前が知られた学校でした。例えば「建国記念日」の設置に反対する紀元節復活反対の集会を校内の円形校舎で開いた時も1-2名の担任が遠くで見ていたぐらいで、その後、おとがめも何も

ありませんでした。それでも、今日振り返ると、考える力をつけさせるというより日本の高校らしい知識伝達システムの一環であったことは否定できません。

それが私の通ったS予備校は、予想に反して、知識の詰め込みや試験問題の解き方のテクニックを教えるというところではありませんでした。むしろ学問に王道なしといった感じで、もっと系統だった考え方を教えるところでした。それもそのはずで、常勤の名物予備校講師もいましたが、大学教員の非常勤講師の方が多かったわけです。英語読本のテキストも薄っぺらで細切れの短文集ではなく、例えばサマーセット・モームの『赤毛 Red』を全文読む方式であったり、物理における物質の運動を教えるのに、高校でやったような加速度の公式を暗記して当てはめる方式ではなく、数学の微分方程式を解くやり方で簡単に解けるように指導する方法であったりした。英語の小説を一冊通して読むことで、なにか核のようなものをつかむコツを覚え、自信をもつことにつながりましたし、物理が決して暗記ものではなくニュートンの力学の雰囲気をそれなりに感ずることが出来たのです。

日本史の講師も、高校の時は「皇国史観」の教員とうわさされていた先生の話はそれなりに面白く、龍安寺の石庭の石が重々しく落ち着いて見えるのは、海中の冰山と同じようにその9割が地面の下に埋まっているからだといったことをよく話してくれました。しかし、ご多聞にもれず、日本が日中戦争や太平洋戦争へと突き進んだ時期は時間切れという形でくわしく話すには至りませんでした。私は、「理系」コースだったので社会は「日本史」「世界史」「政治経済」の内から1つしか選べなかったのが残念で、特にクマさんというあだ名の世界史の先生の講義が面白くて、朝鮮戦争の話など、よく潜りで聴きに行きました。私は、日本史と世界史という分け方はアジアの歴史と日本の歴史が異なるかのような印象を与えてしまうので今でも問題だと思っています。

予備校では、二人の先生が日本史を担当していましたが、アマノジャクの私の常で、この場合も若くて人気がない（受講生の数名と少ない）ほうの講師の講義に出ていました。

そのうちにその講師と話すようになると授業が終わってからも近くの喫茶店でコーヒーをご馳走になりながら歴史に関する話をしていました。実は先生は、東大の国史学科で樺美智子と同じ研究室にいた人間でした。ある時、君は大学闘争の行方はどうなると思うかね？と聞かれてとっさに学生側の敗北になるでしょうと答えたことを思い出します。先生は「ほう、そうか」と言って黙ってしまいました。私は、諸外国に比べたら日本の学生は初心だし優遇されているし、今の大学闘争も言わばファッション（皆がやっているからやっている類）だし、さらに日本では転向といううまい方法がありますからねと生意気に説明したことを覚えています。日本では、踏み絵を踏めばすむわけですが、インドネシアでもメキシコでもそうは問屋がおろしませんでした。また、このときに日本史のことを国史ということを知り、母国語とは違う「国語」の意味も察しがつきました。この言葉がきわめて政治的な単語であることを理解したのです。

翌年の1月が東大闘争のクライマックスというべき「安田講堂の闘い」で、私は、受験勉強

も手につかずテレビの画面に食い入るように見入っていました。東大総長が学生の反乱に手をこまねいてついに大学に国家権力を導入した瞬間でした。その後は、大学自治などというもののはだんだんと絵に描いた餅になっていくのですが。一方、学生の側も、全国の大学の闘争委員会や自治会が集結して全国全共闘なるものを結成してしまいました。私には、それが奇妙に見えました。なぜか自校という生産点を放棄しているように見えました。学生も自治会も、それぞれが自分の大学に依拠（籠城）し、それが抱える具体的問題に基づいて闘うからこそ強いのであって、やみくもに集合し街頭に出れば何とかかなるというのはローザ・ルクセンブルグにかぶれたようなアナクロニズムにしか映りませんでした。そして案の定、後に壊滅することになるのです。

予備校時代の印象に残る出来事は、予備校の三階か四階の教室から見たある日の外の景色でした。その日、授業が終わって帰ろうとしていたら、事務員に制止されました。今、外では、学生と機動隊が衝突して投石も行われているからしばらく教室に残るようにと。

今でこそ神田界隈の道路は投石防止もかねてコンクリートで舗装されていますが、当時は、レンガのブロックで敷き詰められていました。学生たちは、それを砕いて投石に使っていたのです。私が、教室に戻って窓の外を見たとき、学生が投げた一石が飛んできて一瞬空中で静止し、それからまた同様にスローモーションで弧を描いて落下していきました。この美しい曲線こそ、私が初めて実写で目にした放物線だったのです。

## (2) 大学における道草道

1969年春、なんとか都内の私大医学部に滑り込み、大学生時代が始まりました。その私大は看護師をしていた母の同僚の息子さんが行っている大学で、正規に入ると当時授業料が年間15万円(文系の私大でも20万が平均的で、国立の医学部は1万6千円の時代)というのがよかったわけです。そして入学式に出て驚いたのは、二次試験の合格発表では80名あまりの合格だったのが、新入生として式に出たのは120余名だったことです。四月の初めに新入生の合宿旅行が日光でありましたが、同級生の中には、東大の理三の試験が無かったことを悔しがり、こんな大学にしか入れなかったことを酒の席ではありましたが、嘆く者がいて一層驚きました。医学を学ぶのも自分の問題でありどこでも変わらないだろうと思っていましたので、こういう輩と出会うと勝手にしろという気持ちが湧きました。

また、同席した学生部長の名物教授は、先ほどの学生たちに向かって、入った時点では二流でも、君たちは頑張って勉強して一流の医者にならなければならないと叱咤激励していました。下駄をはかせて入学させたのはまだ望みがあるからだ(実は開業医の子弟で金があるからだ)とし、次のような話をしてくれました。ある開業医の親が当時2千万ほど出すので息子を入れてほしいと裏口の相談を受けて、学部長はその親に、それだけのお金があるならいっそ何かの

事業でもさせたらいかがですかと言いましたら、その親は「他に何の才能もないので医者にしたいんです」と答えたそうです。親が医師ではなかった私は、入学早々、医師の階層と言うものが得体のしれない気色悪いものに思えてしまいました。

大学闘争は東大安田講堂の「落城」以後、有名大学の砦も落ち、我が大学も残された数少ない関東のブント（共産主義者同盟）戦旗派の拠点校の一つとなっていました。しかし、私たち新入生と2年生は学部のある文京区の大学本部から離れた千葉県市川市国府台の予科の校舎に通っていました。そこにも自治会の先輩がやってきて立看板を立てたり、ビラを配ったりして大学闘争への参加を呼びかけました。彼らは作戦をたてて中間テストの直前に全学ストライキを提案し学生総会で賛成多数で承認されます。私たち新入生は大学での初めての定期試験が受けなくなかったわけですが、自治会はストライキが目的なので理由はどうでもよかったようです。私はこうしたことからセクト（パルタイあるいは党派）をあまり評価していなかったのが彼らが国府台キャンパスで組織した進学闘争委員会には参加せず、来るその日のためにラグビー部に入り日々、体を鍛えることを選びました（父が北大のラグビー部出身であったからかもしれません）。

ラグビー部に入ってから、都心へはデモに参加するために時どき出かけていきました。私は、鶴見俊輔や小田実が主宰するベ平連（「ベトナムに平和を！市民連合」）の隊列によく参加しました。ベ平連は来るもの拒まず、去るもの追わずだったし、ヘルメットも貸してくれたからです。しかし、デモの隊列ではたいてい前列右側に配置されました。ここは機動隊と一番接触する部分で怪我しやすいため、若い男性が選ばれたようです。私も一度、機動隊員からジュラルミンの盾で思い切り右足の甲を叩きつぶすようにされ一年ばかり痛くて歩くのに不自由したことを覚えています。

ラグビー部には2年生まで所属しました。3年生からは校舎が文京区の千駄木に移ることもあり、また、そのころまでに、ながく関わることになる「中国の会」の人々との交流も始まり多忙になったこともあります。もっとも、一般に、運動部というところが日ごろ試合はあまりせず、練習に明け暮れているのでつまらなくなったという理由もあります。さらに、スクラムハーフのポジションだったのですが、先輩に次ぐ補欠で試合にも年に一二度しか出られなかったのです。

私の父方の祖父は音楽家で、第二次世界大戦前は、旧・満州（現・中国東北部）の南の大連を中心に満鉄管弦楽団の指揮者として活動していました。伯母もピアニストですが、晩年は、祖父が満州国国歌を作曲したとか皇帝の前で御前演奏したとか回顧することしきりでしたので、私は早くから中国に関心を持ちつつも、祖父たちがかの地で「侵略」に関わっていたという複雑な気持ちもぬぐいきれませんでした。入学したとき、国府台キャンパスからの帰り道に中国語教室があり、あまり上達しませんでした。週1回放課後に通っていました。なぜか市立船橋高校の数学の先生が講師でした。

その最初のテキストが毛沢東のやさしい内容の引用本で有名な『老三篇』（「人民に奉仕する」「愚公山を移す」「ベチューンを記念する」）で、その本の中で私にとって今日でも理想の医師像とも言うべきノーマン・ベチューンに出会います。彼は、カナダ人でファシズムと闘うためにまずスペイン内乱に医師として参加しますが、次いで遠い東アジアで日中戦争が勃発したことを知ります。そして使命感から、中国行きを敢行します。そして抗日戦下の前線で八路軍（中国共産党軍）の医療班として働き、1年余りの短い活躍の最中、手術中に誤ってメスで傷つけた傷がもとで敗血症となり落命します。彼はその短期間の間に、通訳の助手を麻酔医に仕立てたり、大衆に医学教育を行ったり、模範病院の建設に携わったりします。戦火の下ではありますが、彼は、日常生活に必要な医療従事者には誰でも訓練すればなれるという信念を持っていました。この考え方は、大学闘争敗退後、沖縄などに行って地域社会でのコミュニケーションのあり方（コミュニケーション+イズム）を模索した学生たちの集団DIC（東京地区解放大学：Destruction is Construction = 古いしきたりを壊すことから新しい生き方の建設がはじまる。）のスローガンにも引き継がれていきました。そのスローガンとは、すなわち「すべての医療能力を全人民へ！」でした。少なくとも彼らは、本来、すべての人民のものであるべき医療能力が医師という一部の特権階級に独占されているという現実を見逃すことはなかったのです。

さて、鶴見和子は「国を超えるナロードニキ」としてベチューン小史を書いています。松岩口模範病院の病院開きの席上で、ベチューンは会衆に向かって語りかけます。その講演の中で彼は技術に関する基本的な考え方を次のように述べています。長いですが引用します<sup>(2)</sup>。

「あなた方と私たちは、国際主義者です。わたしたちは、わたしたちを分裂させる、いかなる民族、皮膚の色、国語そして国境をも認めません。……わたしはあなたがたから、多くの値打ちある教訓を学びました。あなたがたは、無私と、協力と、大いなる困難に打ち克つ精神を学びました。わたしはあなたがたにお礼を申し上げます。そのお返しに、わたしはあなたがたに技術の習得について、いささかでもお教えしたいと思います。

「勝利への道は技術を習得し、指導者を育てることです。……わたしたちは技術を、少数者を富ませるためではなく、数百万人に幸福と繁栄とをもたらすために使うべきです。

「わたしが指導者と言うのは、小さい集団の『小さい』指導者のことをさしているものであって、大集団の大指導者をいっているものではありません。『小さな指導者』を育てることが、自律的に行動し、しかも社会意識をもった個人からなる社会へと、人間社会を革命的に改造するために、絶対に必要なことです。それが出来れば、いわゆる指導者は、国家そのものと同様に、やがて死滅するでしょう。……まずは自分自身の指導者におなりなさい。どんな指導者も、まずから自らを指導することから始めます。

「現在あなたがたの指導者である人々は、それぞれの経験によってそうなったのですが、やがてやめさせてもらおうと一生懸命努力しております。わたしたちは、あなたがたが、

私たちの仕事と責任とを肩代わりしてくれることを熱望しています。そうなった時には、わたしたちは引退して、あなたがたがわたしたちより優れた点を（羨望をもって）讃めたたえるでしょう。

「……『小さな指導者』がいないと、独裁者が出てくることになったり、いわゆる『偉人』や『大英雄』がじゃじゃばりでて、崇拜を強要し、わたしたちは羊のようについて行かなくてはならなくなるでしょう。」

ベチューンは、技術とは「物質と過程の支配」であり、床を掃くとか、包帯を巻くとか手術をするとか、等々の日々の大小様々な仕事をもっとも能率的に目的にかなったようにすることとしながらも、その技術、すなわち人間の不幸や苦痛を少なくするという目的と方法には人間的価値観をともなっていることが要請されています。鶴見は、ベチューンを、国境を超えるナロードニキであると同時に、倫理的規範的な抽象性よりも、模範的実践的であった点を評価しています<sup>(3)</sup>。

私は、鍼灸師の人たちや針灸に関心がある草の根運動の人たちと一緒に、東京で「ベチューンに学ぶ会」をつくり、針灸を習い始めました。そこでは、内科診断学の話を担当したりして一般の人たちが自己治療することの手助けをしていました。そのメンバーの何人かは後に国家試験を受けて鍼灸師になりましたので、針灸は一般の人々が習得しやすい医療技術の一つであることに気づきました。針灸や漢方では、診断（証）がつけば、それに治療が対応しているからです。西洋近代医学では、決してそうではなく、診断がついても治療法がないことが少なくありません。例えば、単一遺伝子病は7千種類ほどありますが、そのほとんどに根本的治療法はありません。

また、「ベトナム留学生支援の会」にもときどき顔を出していました。南ベトナムからやってきた留学生が、日本で北ベトナムや冷戦のことなどを知り、母国の方針に逆らい国費留学生が支給を打ち切れ、問題思想（共産思想）の持ち主として日本で生活も帰国もままならない状態で陥った留学生を援助するという組織です。このときに知り合ったベトナム人で今でも年賀状のやり取りをしている人がいます。当時から日本語がとても上手で感心しましたが、どうやって勉強したのかと尋ねると、「広辞苑」を全部読んだと答えたのでそういうやり方もあるのかとびっくりしました。彼らは、南ベトナム出身ですが、日本で北ベトナムに共感をもつようになっていました。ある時、北ベトナムの政府要人が来日すると言うので彼らと一緒に羽田空港に出迎えに行ったのですが、日本共産党の幹部がVIP 出口に招き入れ、彼らとは挨拶する暇もなくどこかに行ってしまいました。

私は、国府台キャンパスと自宅との間を2-3時間かけて通っていました。その通学時間は、教科書を読んだり、仮眠の時間であったりしました。そして、帰りは代々木にある「中国の会」の事務所によく立ち寄っていました。その会は、確か60年安保に抗議して大学教授を辞任した、

中国文学者の竹内好が主催する会で当時日ごと色々な人々が入り出していました。ここも来る者拒まずの組織だったのです。そこに行くと、只酒や酒の肴が食べられることも魅力でしたが、20代後半や30代の先輩の大人の話が聴けることが最大の目的でした。「中国の会」のとりきめで特に感心したのは「良識、公正、不偏不党を信用しない」と「真理において自他を差別しない」ことでした。

そのうちに、その会の若い人がやっている「アジアの映画を観る会」の主催者側のスタッフになっていました。自主上映の走りです。観た映画の多くは、当時の文化大革命前の中国映画（文革で批判されたものなど）や北朝鮮の映画、さらには、当時珍しかったアラブの記録映画やベトナム戦争の記録映画（確かキューバ制作だったか）などでした。毎月上映し、当時としては入場料300円と高めでしたが、100人以上入れば、借りてくるフィルム代ととんとんでした。毎回前座に30分ほどの講演があり、ちゃんとしたパンフレットも1月がかりでつくって配布していました。35ミリフィルムの扱いは劇場の専門家に依頼するしかありませんでしたが、18ミリの場合は、自分たちで映写機もまわしていました。

記憶に残っているのは、北朝鮮の映画「花売の乙女」などを観た時、教室の風景が出てきて「起立！礼！」などとやっている姿は、日本の小学校の姿によく似ていたことです。植民地は、宗主国から独立を勝ち取るわけですが、宗主国の影響も残しているものだなと感じました。NDU（日本ドキュメンタリスト・ユニオン）の沖縄映画「モトシンカランヌー（元手がかからない商売：Sex workerなどの意）」は印象に強く残っており、今も観たい記録映画です。今世紀になってからも、たまに上映会が行われているようです<sup>(4)</sup>。

「中国の会」の事務所に入り出していると色々な耳学問が出来ました。東アジアを中心とした近代史を脱構築することができたことも大きな収穫でした。そこでは、輝かしい明治維新も色あせたものとなってしまいました。こうして、大日本帝国は、戦略通りの道を邁進することになります。司馬遼太郎は、日本は日露戦争以降、変わったとしているらしいですが、明治維新の以前からその方針は決まっていたようです。会で聴いた話では、日本は中国の各省に中国語の堪能なスパイを送って入念に調査をさせているということでした。こうして沖縄の領有（琉球王国は江戸時代薩摩が滅ぼすが、その後明治政府の領有となる）と台湾の領有、朝鮮半島の領有、満州国設立によって中国東北地方を領有すると着々と植民地支配を続けて行くわけです。また、戦争の仕方についても、緻密のようになって実はずさんで、孫子の兵法も読んでいないのではないかという側面も多々あります<sup>(5)</sup>。第二次大戦後70年の昨今、やっと解禁されたかのような記録映画のラッシュで明らかにされる情報からは、ますますそう思わざるを得ません。どうしてこうもいい加減だったのでしょうか。この性質は、残念ながら戦後70年の今も政府や官僚に「見事に」受け継がれているように思います。

### （3） おわりに～傍流への道

大学卒業後、脳外科の医局に入局することになりました。最初、小児科を希望していましたが、実習で回ってみると獣医になるような気分になりやめて中枢神経に関する外科を選んだわけです。せっかく入局した以上、何か実験研究がしたかったので調べると、生化学と生理学の実験をやっている先生がいましたが、私は英国留学から帰った生理学の先生の実験を手伝わせてもらえることになりました。ところが、私を医局に誘ってくれた当の先輩が、あの先生はやめた方がいいと圧力をかけてきました。理由は、教授から嫌われているからだということでした。なぜ嫌われているかという、教授より手術が上手いかららしいことが麻酔科からの情報で解ってきました。麻酔科にしてみれば、手術がうまく早く終わった方がよいに決まっているからでしょう。私は、先輩の説得に応じませんでした。準絶交扱いになりました。

さらに、試練がやってきました。教授から、文章のきめ細かさが認められたためか、教授の出身の大学で研究会があるので、君に発表してほしいと言われ、大学のワクチン研究所で非公式に処方されているMワクチンが脳腫瘍に効いた（治ったわけではないが）という4症例をまとめように指示されました。早速、4つの症例を調べてみると、確かにMワクチンを使用した後、症状が改善したとも言えますが、手術や放射線治療もその前にやっていました。そこで、私がつどり着いた見解は手術・放射線・ワクチンのいずれかがあるいは全てが効いたと考えられるというものでした。それを教授や助教授に開陳すると、それではだめで最後に使ったMワクチンが効いたと結論するようにつく言われてしまいました。私は、納得できなかったので、生理学の実験で指導を受けていた講師の先生に相談しました。すると彼は、同意見だと言ってくれましたが、どうしろとは言わなかったので、聞きました。もし教授の言うとおりに発表したらどうなりますか、と。すると、そういうことを2度3度とするなら、指導はやめさせてもらおう、と。それなら、嘘を言うことは、1度でも同じことだし、私も医学者として恥じないためには発表を取りやめようと決心し、発表には行きませんでした。

結果は、2週間後に示されました。麻酔科が管理する救命救急センターに出向を命じられました。研修医身分だった私の指導医も連座して出向させられました。脳外科病棟では、もう私は二度と病棟に戻れないだろうと噂されました。また、出向先は、出向する脳外科の医局員が麻酔科の教授（部長）からいじめられるということでも、恐れられていました。私は、どうなる事かと思ったのですが、意外にも麻酔科の部長からは結構可愛がられることになったのです。敵の敵は味方という法則が効いたようです。生理学研究の講師は、病棟の患者は手術出来ないようにされていましたが、麻酔科の部長は、救急患者の手術を脳外科の教授に内緒でさせてあげていることもわかりました。

その後、恩師の講師が助教授に昇格し羽田空港近くの公立病院に脳外科部長として派遣されて行きました。私も、1年後、救急医学の研修を終えると助教授のもとに自分の意志で移って



行きました。そこには、大学の医局に残らなかった4年上のCT先輩もいました。彼は、大学闘争時代に開放されていた東大病院で脳外科手術を見学した時の興味深い話をしてくれました。その時は小脳の手術をしていたのですが、頭を開けてしばらくすると、生理学の研究部隊がやってきて小脳の何箇所かをちょっと刺激してみると要求し、術者はその通りにし、また、次に生化学部隊がやってきてちょっとそのあたりの標本を切り取ってと言うと術者は切り取って提出したとのことでした。もちろん、当時は、小脳の外側3分の1は切除しても症状は出ないとされていましたが。

また、件の先輩も最初の脳動脈瘤の手術のときに、顕微鏡(8倍くらいの弱拡大)で見るととても大きく画面全体になってしまいます。そこでビビって手が震えピンセットとメスの先が定まらない時に後ろから声がかかりました。それは日本の脳外科医の先駆けの一人であった病院長でした。院長先生は「CT, 落ち着け! 死ぬのは患者だ, お前じゃない!!」とブラックジョークさながらの檄を飛ばしたのでした。それを聞いて先輩は我に返って手術はうまくいったということです。その院長先生は、米国の脳外科の草分けのダンディ・ウォーカーに師事していました。そのダンディ先生は、初期のころ小脳の手術の術式を決定するために、小脳の手術をしていたときに、患者の状態が悪くなり、麻酔科医が手術の中止を勧告しました。先生、止めて下さい、もう患者の血圧が測れません。しかし、先生はこう答えました。まだ手術が終わっていません、と。草分けの脳外科医が、他の分野の外科医たちから「殺し屋」と呼ばれていた時代の話です。屍を超えて進むのは何も戦場ばかりではなかったことを知りました。

私は、その後、山形県の関連病院に異動になり、そこで数年間過ごした後、医学哲学を学ぶために半生を過ごした東日本から初めて関西に移り転生をめざします(その後半生は別の機会に)。以上、前半生を10文字以内にまとめるとこうなります。「まあ色々ありました。」<sup>6)</sup>

〔注〕

- (1) 「大学闘争」と言わずに「大学紛争」という言い方は政府やマスコミ側の批判的なネーミングで、筆者は終始違和感を感じるため自ら使用することはありません。
- (2) 鶴見和子「ノーマン・ベチューン～国をこえるナロードニキ」, 雑誌『中国』第85号, 19-32頁, 1970年
- (3) 鶴見和子, 前掲論文, 36-37頁
- (4) 1971年NDU制作の'69-71年沖繩エロス外伝「モトシンカカラシヌー」(16mm, 87分)は、返還前の沖繩に密航し、娼婦ややくざ・日本からの労組や観光客を取材。NDUは、早稲田大学の反戦連合から生まれた映画集団。そこには、放送研究会, 出版事業研究会(出研), カメラルポルタージュ研究会(カメルポ)などのさまざまなメディア活動をしていた集団が集まって出来た集団。  
(<http://www.mosakusha.com/web-geppou/2012/11/ndu.html>, 2015年10月1日アクセス)
- (5) 例えば、次のような部分です。
  - ・「戦争では、少々まずい点があっても早く切り上げるのが得策。長引けば長引くほど兵士の士気は衰え、国への経済的打撃も増すので、長期戦は望ましくない」
  - ・「最上の軍隊は、敵の謀略を見抜いてそれを未然に打ち破ること(最上の勝ち方とはスパイや画

《隠謀学》入門Ⅳ（村岡 潔）

策や謀略によって勝敗を決すること、すなわち、戦わずしてかつ）、次は、目に見える外交交渉で決着をつけること（これも武力を使わない）、それでも止むを得ない場合は、戦力をもって交戦する。」

・「彼を知り、己を知れば百戦してあやうからず（敵の実情をしり、自軍の実態を知るならば、百たび戦っても危ういことはない）」（湯浅邦弘『孫子』NHK出版、2014年、より抜粋）

このように日本軍は「敵を知らず、己も知らない状態だったので100戦しても危うし」の状態だったのです。

- (6) 清水義範『国語入試問題必勝法』講談社文庫、1990年、32-58頁のパロディ。

（むらおか きよし 社会福祉学科）

2015年10月30日受理